

宮内庁書陵部所蔵九条家本『三条西実隆詠百首和歌』について

——『雪玉集』定数歌本文の検討を中心に——

太田 克也

【解題】

『三条西実隆詠百首和歌』〔九・五〇六〕〔江戸時代〕写

卷子装一軸。新補表紙。外題、打付墨書「三条西実隆詠百首和歌」。

全五紙。法量（本紙）、縦二七・四×横二二・八センチメートル。字面高さ、約二五・五センチメートル。一首一行書き。九条家本。二〇〇九年度に『三条西実隆詠草』〔九・一〇〇七八〕と共に整理され、二〇二二年九月に本所H-CAT Plusよりデジタル画像を公開している。

本史料は、享祿四年（一五三一）三月に行われた春日祭に合わせて、三条西実隆が春日社へ奉納した百首（以下「春日法楽百首」または「本百首」）の伝本である。この年の春日祭についてはまとまった分量を持つ史料に恵まれないが、本百首の成立事情については、『実隆公記』及び家集『雪玉集』収載の本百首末尾に付された識語によっておおそ知ることができる。この年の春日祭は二月五日に行われるはずであったが、三月十一日に延引された。実隆はそれに合わせて、同月四日から五日間で百首を詠み（『雪玉集』）、詠み終えた後の九日には恋部の初め迎りまで清書、翌十日には完了して上卿の甘露寺伊長へ渡し、伊長が春日社へ参向した十一日に奉納されたとみられる（『実隆公記』享祿四年三

月九・十・十一日条）。

ところで、本史料は整理の時点で実隆自筆とされており、その見解は「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」でも引き継がれている。もしその通りに自筆であると認められるならば、『雪玉集』の本文、延いては成立を考える上で有用な史料となり得る。というのも、『雪玉集』は実隆没後、後人によって編纂されたものであり、自筆史料と照合することができれば、編纂の際に用いられた資料の性格を明らかにすることに繋がるからである。そこで以下に、筆跡と本文の比較検討によって、この点を検証してみたい。

まず筆跡から検討する。本史料の筆の運びは忽卒な印象があり、その点も考慮に入れなければならないが、他の自筆史料と比較してみると、どうも実隆自筆とは認め難いように思われる。本史料に頻繁に出てくる特徴的な文字に注目すると、例えば「を」は第一画を点のように書き、それ以降を「と」のようにくずしているが、他の史料ではそのようなくずし方をしていない。また「能」を字母とする「の」は傍の最後を止めてから少し膨らませて下へ続けているが、他の史料では右へ払っていて異なっている。他にもこうした違いの見られる文字が散見する。「堯空」の署名には似通う雰囲気があるものの、細部をよく見てみるとやは

り違いがある。以上の点から考えると、本史料は自筆ではなく、写しであると判断すべきではないだろうか。

次に本文の面から検討する。『雪玉集』の構成や成立過程については、伊藤敬氏の研究が³⁾ほぼ唯一のものである。『雪玉集』自体が大部であるために複雑で、伊藤氏の詳細な論考も相俟って、稿者も十分に消化し切れているわけではないが、簡単に触れておく。現在通行している『雪玉集』（『新編国歌大観』『新編私家集大成』は寛文十年（一六七〇）版本を底本としている。これはそれ以前に存在していた写本類に見られる歌を編集したものである。写本の形を取る実隆の家集は、中本（御本）四冊本系、狹本（御本の異本）三冊本系、広本（御本ノ外）の収集部を持つ異本）系、定数歌集の四種類に分けられ、それぞれの全部または一部の歌が組み込まれて、版本『雪玉集』を構成することになった。本稿で扱っている春日法楽百首は、広本系写本と定数歌集の一部の伝本に見えており、版本にも収録されている。従って、春日法楽百首の本文を検討するためには、『雪玉集』の版本に加えて、上記の写本も比較の対象とする必要がある。

広本系写本と定数歌集のうち、本百首を含むもので、今回本文を比較することができたのは、以下の十二本である。（*は所収定数歌とその配列を同じくするもの。）

・版本と百首の配列が同じ本⁴⁾

* 大阪公立大学杉本図書館森文庫蔵「雪玉集」[九一一・一四八・SAN・

MORI] (略称「森」)

* 国立国会図書館蔵「雪玉集」[八三〇・一七三] (略称「国」)

* 宮内庁書陵部蔵「聴雪集」[五〇一・七四〇] (略称「宮聴」)

* 尊経閣文庫蔵「逍遙院詠草」[二三・一六・大] (略称「尊道」)

* 尊経閣文庫蔵「聴雪集」[九四・古] (略称「尊聴」)

・版本と百首の配列が異なる本

* 宮内庁書陵部蔵「逍遙院内府百首」[五〇一・七三八] (略称「宮逍」)

* 宮内庁書陵部蔵「詠百首和歌」[五〇一・八二四] (略称「宮詠」)

* 熊本大学附属図書館寄託細川家北岡文庫蔵「瑤雪集」[一〇七・三

六・六] (略称「北」)

* 鳥原図書館肥前島原松平文庫蔵「雪玉集」[一三七・二〇] (略称

「松」)

* 兵庫県立篠山鳳鳴高等学校青山文庫蔵「雪玉集」[九一一・二二八・

一] (略称「青」)

* 早稲田大学図書館蔵「聴雪集」[八四・六六一九] (略称「早」)

・単独本

国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本「逍遙院春日祭百首」

[H・六〇〇・一五五五] (略称「高」)

諸本の所在を精査したわけではないので遺漏もあるが、ひとまず以上の伝本を検討の対象とした。広本系写本は森・国・松・青で、それ以外が定数歌集である。定数歌集のうち、早は伊藤歌書誌に未掲載のもので、大口周魚（鯛二）旧蔵、巻首三葉と外題が烏丸光広筆であるとする周魚の注記がある。

以上の伝本の本文と本史料を比較してみると、本文の面から見ても、やはり本史料が実隆自筆であるとは考え難い。というのも、自筆とするには不審な本文が見られるからである。それは以下のような例である。

（新編国歌大観番号 本史料―版本）

4359 くまな成かり―くまなかりけり

4380 みせて―しけらせて

これらは本史料の独自異文で、なおかつ文意も通らない。仮に本史料が草稿のようなものであったとしても、このように和歌本文として成り

立たないものが記されることはないように思う。他の異同箇所も併せて考えると、転写の際に書き誤ったものと見るべきであろう。そうすると、本史料は定数歌集の単独本の写本ということになる。

では春日法楽百首の本文の中では、本史料はどのような位置づけになるのであろうか。この点を考える前提として、版本と写本の本文の關係について、春日法楽百首に限ってではあるが整理しておきたい。『雪玉集』の版本、広本系写本及び本百首を収める定数歌集のほとんどには、百首の末尾に次のような識語が置かれている。⁽⁵⁾

享祿四年三月、以春日祭勅使御次、逍遙院法樂也、三月四日より至八日五ヶ日之間詠之云々、以自筆書写之同校合、同年五月十日、

これによれば、実隆の自筆本（奉納したものか手控えかは不明）を成立後の近い時期に書写したものが元になっている。それが他の定数歌と共にまとめられて歌集を成し、版本に収まったことになる。そこで版本の本文が写本の本文とどれほどの相違があるか確認してみると、以下のような異同がある。

（新編国歌大観番号 版本―他本⁽⁶⁾）

- 4373 行春に―ゆく春よ
4381 そらすみわたり―空すみわたる
4408 秋の色々な―秋のそらかな
4418 月すみけれ―月はすみけれ
4431 こひもと―こよひもと
4434 身うきぬへし―身もうきぬへし
4446 うらやまも―海山も

これらは版本のみに見られる異文であり、誤りと判断してよいであろう。広本系写本や定数歌集と照合していれば「本ノマ、」が残ることはないから、版下となった写本の段階で本文に欠陥があり、それをそのま

ま受け継いだとみられる。『新編国歌大観』でも校訂されていないものがあるので、同書の本文を利用するときは写本を併せ見る必要がある。

こうした独自異文がある一方で、一部の伝本と一致する異文を持つ箇所もある。煩瑣になるので一々掲出はせず、末尾の「主要異同一覧」を参照されたいが、広本系写本と定数歌集の青・早・高辺りと一致する傾向がある。あくまで本百首の本文に限ったことなので、他の百首の本文も同様であるかはわからないが、定数歌部分の本文の源流を考える際の参考にはなるう。

肝心の本史料の本文であるが、前掲の不審本文以外にも、以下のような独自異文がある。

（新編国歌大観番号 本史料―他本⁽⁷⁾）

- 4369 □ろかなる―おろかなる⁽⁸⁾
4378 花たちはなの―花たち花や
4379 花のはやしや―はなのはやしに
4393 た、しら菊の―た、しらきぬの
4394 千草にしるき―ちくさにしけき
4400 おとろかしけり―おとろかしける
4403 しつくはりなき―しつくわりなき
4411 木からしさ―木からしは
4425 いまはしのふの―なに、忍ふの
4427 あふきてものみ―あふまてとのみ
4433 あまりたる―あまりある
4443 心をすまぬ―すまぬ心を

転写の際の単純な誤りとみられる箇所が多い。本史料はこのように独自異文が目立つ方であるので、その点信頼の置ける本文とは言い難い。また単純に異文の数で比較してみると、北と最も近く、国・尊追・尊聴

と続く。反対に距離があるのは森・松・青・早・高などである。本史料と直接的な関係を示す伝本は見当たらず、本史料の基づいた伝本がどのようなものであったのかはわからない。

以上、簡易的な検討ではあるが、本史料の性格について考えてみた。結論としては、実隆自筆とは認め難く、定数歌集の一写本として扱うべきである、ということになる。通行する『雪玉集』の本文は版本を底本としているが、本稿で見えてきたように、写本を見るべき箇所が少なくない。加えて『雪玉集』の研究が伊藤氏以降ほとんど進展していないので、写本類の画像公開、及びそれに伴う本稿のような解題は必要な作業であろう。残りの写本についても同様のことがなされ、『雪玉集』の研究が進むことを期待したい。

【主要異同一覧】

〔凡例〕

- ・ 版本の本文を基準とし、複数の伝本が一致する異文を掲げた。従って略称が見えない伝本は独自異文を有するということである。
- ・ 訂正がなされている場合は原則として訂正後の本文を採った。訂正前の本文が対立する異文と一致するときは、略称に傍線を付した。
- ・ 朱書による傍書等は反映させなかった。そのため原本では朱書によって対立する異文となっている場合もある。
- ・ 本史料の略称は「九」とした。

(新編国歌大観番号 版本 (同じ本文を持つ伝本) — 異文とその伝本)

4356 しるへにまたん (森・国・宮道・宮詠・青・早・高) — しるへにやらん (九・宮聴・尊道・尊聴・北・松)

4358 露そこほる、 (九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・

青・高)⁽¹⁰⁾ — 露そしほる、 (松・早)

4364 錦きて (九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・松・早) — しきにて (青・高)⁽¹¹⁾

4373 名残ならずや (九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・北・松・早・高) — わかれならずや (宮道・宮詠・青)⁽¹²⁾

4374 さほの川風 (九・国・宮聴・尊道・尊聴・北・高) — さほの山風 (森・宮道・宮詠・松・青・早)⁽¹³⁾

4375 雪たにあるを (九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・北・松・青・早・高) — 雪たにあるを (宮道・宮詠)⁽¹⁴⁾

4378 ふくへくもなし (森・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・松・青・早) — ふるへくもなし (九・宮道・宮詠・北・高)

4379 はなのはやしに (森・国・宮聴・宮道・宮詠・北・松・青・早・高) — 花のはやしや (九・尊道・尊聴)

4382 真木の戸の (九・宮聴・尊道・尊聴・北・松・高) — 槇の戸を (森・国・宮道・宮詠・青・早)⁽¹⁵⁾

4384 秋はいまた (九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・北・松・青・早・高) — 秋はまた (宮道・宮詠)

4385 いふせきに (九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・北・松・青・早・高) — いふせきを (宮道・宮詠)⁽¹⁶⁾

4386 身のよそならず (九・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・高) — 身のよそなら (森・国・松・青・早)⁽¹⁷⁾

4388 神しはや (森) — 神しはやく (九・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・松・青・早・高)⁽¹⁸⁾

4394 野への夕暮 (九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・早・高) — のへの夕露 (松・青)

4396 かりは来にける (九・国・尊道・宮道・宮詠・北・松・青・早) —

- 雁は来にけり(森・宮聴・尊聴・高)
- 4406 は、その色よ(九・森・国・宮道・宮詠・北・早・高)―は、その色に(宮聴・尊道・尊聴・松・青)⁽¹⁹⁾
- 4414 山おろしのこゑ(九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・北・早・高)―山下風のこゑ(宮道・宮詠・松・青)⁽²⁰⁾
- 4420 ちるはなの(九・森・国・宮道・宮詠・松・青・早)―ちるはな(宮聴・尊道・尊聴・北・高)
- 4425 あちきなく(九・森・国・宮道・宮詠・北・松・青・早・高)―ち、きなく(宮聴・尊道・尊聴)
- なに、忍ふの(森・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・早・高)―何を忍ふの(松・青)
- 4429 そのま、に(松・青)―其ま、の(九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・早・高)⁽²²⁾
- 4430 まつや待らんみ(森・尊道・高)―まつや待見ん(九・国・宮聴・尊聴・宮道・宮詠・北・松・青・早)
- 4431 道のさ、はら(九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・宮道・宮詠・北・早・高)―道のしのはら(松・青)⁽²⁴⁾
- 4435 いくたひの(九・国・宮聴・尊道・尊聴・北)―幾度か(森・宮道・宮詠・松・青・早・高)
- 4437 あれはある世にを(九・森・国・宮道・宮詠・松・青・早・高)⁽²⁵⁾―れはある世を(宮聴・尊道・尊聴・北)⁽²⁶⁾
- 4439 ものと成けんと殿私(九・森・国・宮聴・尊道・尊聴・北・松・青・早・高)―物と殿私とは成けむ(宮道・宮詠)
- 4440 有明本ノマのそらに(宮聴・尊道・尊聴・松・青・早)⁽²⁷⁾―有明の月に本ノマ(九・森・国・宮道・宮詠・北・高)
- 鶴のなく空(森・国・尊聴・宮道・宮詠・北・松・早・高)―鶴の

鳴声(九・宮聴・尊道・青)

4449 みるそくるしき(九・国・宮聴・尊道・尊聴・北・松・青・高)―みるそかなしき(森・宮道・宮詠・早)⁽²⁹⁾

注

- (1) 『彙報(平成二十一年度)』(『書陵部紀要』六十二、二〇一一年) 参照。
- (2) 今回は国文学研究資料館蔵『万葉一葉抄』[九九・七一](<https://kokushonjil.ac.jp/biblio/20006811/>)、宮内庁書陵部蔵『年中行事五十番歌合不審条々』[B六・七五〇](<https://kokushonjil.ac.jp/biblio/100245824/>)と比較した。なおこれらを対象としたのは、追試験証の便宜のためにWeb上で見られる史料を優先したためであり、それ以上の意図はない。
- (3) 「三条西実隆と和歌―雪玉集のこと その二―」(『国語国文研究』三十、一九六五年)、「雪玉集」定数歌考」(『苦小牧工業高等専門学校紀要』創刊号、一九六六年)、「室町後期歌書誌―実隆・基綱・済継・統秋・宗祇・道堅―」(『苦小牧工業高等専門学校紀要 人文科学編』四、一九六九年。以下「伊藤歌書誌」)、『私家集大成』解題及びそれらを踏まえた『新編国歌大観』解題(井上宗雄氏執筆)。また伊藤敬「室町時代和歌史論」(新典社、二〇〇五年)に総括的な見通しがある。
- (4) この他に、伊藤歌書誌によれば、田中重太郎氏蔵「雪玉集」があった。
- (5) 引用は版本に拠り、私に読点を付した。
- (6) 本文は定数歌集の宮聴に拠る。
- (7) 本文は版本に拠る。
- (8) 「お」の字母である「於」の旁のような文字。
- (9) 宮道・宮詠は「やら」を傍書する。
- (10) 森・高は「しイ」を傍書する。
- (11) 「き」を傍書する。
- (12) 宮道・宮詠は「名残」を傍書する。
- (13) 宮道・宮詠は「川」を傍書する。

- (14) 見せ消ちにして「私る歟」を傍書する。
 (15) 宮道・宮詠は「のイ」を傍書する。
 (16) 「イらず」を傍書する。
 (17) 宮道・宮詠は「無イ」を傍書する。
 (18) 「リイ」を傍書する。
 (19) 「よイ」を傍書する。
 (20) 宮道・宮詠は「は歟」を傍書する。
 (21) 「ち、イ」を傍書する。
 (22) 「に」に重書する。
 (23) 森・尊道は傍書ナシ、高は「ちみイ」を傍書する。
 (24) 「さ、イ」を傍書する。
 (25) 九・森・国・松・青・早・高は傍書ナシ。
 (26) 国は「はイ」を傍書する。
 (27) 宮聴・尊道・尊聴・松・青は傍書ナシ。
 (28) 「月イ」を傍書する。
 (29) 宮道・宮詠は「くるイ」を傍書する。

【翻 刻】

〔凡例〕

- ・翻刻の要領は通行に倣った。
- ・各紙の変わり目に」を付し、(第1紙)のように紙数を示した。

詠百首和歌

堯空

春二十首

4370 4369 4368 4367 4366 4365 4364 4363 4362 4361 4360 4359 4358 4357 4356 4355 4354
 あめのしたのとかなるらし三笠山春きにけりと明る光は
 いつくよりたつとも見えす浅緑四方の霞のひとつ色にて
 花もまたさきあへぬ程は何をかもしるへにやらん谷の鶯
 手につみて先やかへらんわかなおふる雪まの野への梅の初花
 かとさしてかきほを道の浅茅原柳のめにも露そこほる、
 木隠ものこらすみえて中／＼におほる月夜はくまな成かり
 袖の上にふりこそまされ春の雨のこまかに物をおひくたけは
 つく／＼となかめ／＼てはては身をなきたるあさの春の明ほの
 おもひたつ心になふ春の雁旅なる人はうらやむぬへし
 年毎にかならすおなし色香のみ花のときは人そふりゆく
 やと毎の木々もや花のにしき、て都はもとの春にかへらむ
 とともにみん人やたれなる鳥の音もきこえぬ花の嶺のいほりは
 わすられぬ夢かとそおもふ芳野山雪ふみ分し花の下道
 えたの上に見しよりも又そらに吹嵐の花の一さかりかな
 影うつす山にも春やふか、らし苗代水のそこすみにけり
(於ノ旁カ)
 春の野はすみれにましりそれとなき花さく草そ分もやられぬ

4394 4393 4392 4391 4390 4389 4388 4387 4386 4385 4384 4383 4382 4381 4380 4379 4378 4377 4376 4375 4374 4373 4372 4371
 むら雨の山の下柴ほろ／＼と羽音もぬれてたつき、す哉
 あふきみる藤の鳥居の花のかけなひく末／＼代をかさねてん
 衣／＼は人にそかきるゆく春よたかためもうきなこりならずや
 夏十五首
 たちかへてす、しき今朝のから衣かけてほさんさほの河風
 きえやすき雪たに有を卯花は窓の光にうへてこそ見ぬ
 あやにくにまたぬ人にし郭公もらさはあたら初音ならまし
 郭公山より月のいてやとおもひたつへき空のけしきを
 いろかへぬ花たちはなのいか、とて苔の袖をはふるへくもなし
 五月雨はいくかの雲の生駒山雪はきのふの花のはやしや
 庭の面はこゝろのまゝにみせて花にさくへき千種をも見ん
 夏の夜のそらすみわたる月影はいつくの霜をかさ、きのほし
 此比はあけなからなる真木の戸の心もしらぬくゑなどそきく
 底ふかきおもひや残る猿澤の池のほたるの玉藻かくれに
 秋はいまたこすゑのせみの涙にやうつろひそむる下葉なるらん
 よそに見るけふりはかりもいふせきにさこそしつやの夜の蚊遣火
 おもふには蓮のうへにゐる露を身のよそならす見るかす、しき
 こゝにひゝきかしこの雲になる神の心をたくゆふたちのそら
 神しはやくうけはか、らしいくかへりうき三輪河のみそきしつらん
 秋二十首
 八重葎とちこもりてしやとをしも先とひけりな秋の初風
 七夕にねかひの糸もくれ竹のうきふしにのみ世をつくせとや
 秋の風萩の葉ひとつあらなくに何ゆへわきてやと、しむらん
 露けしなふるき都の道芝にしきをしける秋萩の花
 朝ほらけ露のかゝれる蛛のゐはた、しら菊のつゝむ木々かな
 花のいろにあらそひけりな虫の音も千草にしるき野への夕暮

(第1紙)

4419 4418 4417 4416 4415 4414 4413 4412 4411 4410 4409 4408 4407 4406 4405 4404 4403 4402 4401 4400 4399 4398 4397 4396 4395
 秋ふかく風の身にしむ夜な／＼はき、なれし外のさほしかの声
 心たゝわかとこよにもとめしとや又そ雲井のかりは来にける
 秋よいかに夕はわきてなcameよといさめぬ露も袖におつらん
 月はよに光へたてぬ天のはらもろこし人もいかにみるらん
 耳なしの池の心をすましては身もなけつへき月の影哉
 うつるをも月にはすれし秋の夜のおとろかしけり鳴の羽かき
 かたふくはあかぬか上に待よひのをそく成ゆく有明のころ
 かくれゆく浦のはつしまはつかなるなこりを月にしたひわひつ、
 いつみ川また夜をこむる朝霧にしつくはりなき舟のうち哉
 待人はとをきさかひの秋寒みたよりをいそく衣うつ也
 秋の菊心ばかりは霜の後を松にちきりてさきやそむらん
 さほ山のは、そのいろよおしとおもふ秋の日数になしてみましを
 今朝のまのそめてかはかぬ紅葉々をたちかへりとふゆふ時雨哉
 一とせの三か一をのこしをきてかへるはつらき秋のそらかな
 冬十五首
 初時雨ふる川のへの杉の葉のつれなき色も冬はきにけり
 龍田川秋はきのふそくれなる山のこのはこゝをとまりに
 木からしさ下もみちせし松の葉も吹つくしたるかけのさひしさ
 霜かれはお花かもとの草をのみこゝろの秋のよすかにやせん
 しけかりし蘆辺ともなき冬枯にこきゆく舟の見えてまちかき
 いくさとの霜の枕にかこつらんはつせのかねの山おろしの声
 真砂をもとちあけ、りなはまゆふのいくへともなくこほりかさねて
 なく千鳥ゆくかた遠み波の上は雲もあらなくにきえかへりつ、
 あひおもふともねしてたに嵐ふく梢のをしのわひつ、やなく
 かりはらふ田面の水の上にこそ秋も見さりし月はすみけれ
 かゝり火のかけたえ／＼に網代もる床さむからし夜の河風

(第2紙)

4443 4442 4441 4440 4439 4438 4437 4436 4435 4434 4433 4432 4431 4430 4429 4428 4427 4426 4425 4424 4423 4422 4421 4420
 ちる花のつもるは月の光にてあらぬなめの庭のしら雪
 跡つくる人こそあらめ松をとふ風も音せぬ雪のうちかな
 ことかはす物にもかなやさゆる夜のね覚かたらふねやのうつみ火
 くるはるをむかふるかたにいそかれてゆくらん年はおしむともなし」
 (第3紙)
 恋十五首
 しらせはや雪まの草のはつかにもわかつたもえのしけき心を
 あちきなくいまはしのふのすり衣みたれていまはいろに出なん
 めのまへのつらきまゝにて恋しなは後の世としもたのみかたしな
 かたいとをよるの心のくるしきはあふきてものみおもひねの夢
 消はてんほとをまてとや中そらにうきたる雲のゆく末かなしも
 無名そといはんもあやな其まゝにおもひなるへきえにもこそあれ
 まことにはたのむとなしに此暮もおもひのとめてまつや待見ん
 いたつらに分かへりなほこよひもと露のおもはんみちのさゝはら
 又いつとたのめんよりもたまさかの一夜をせめてあかしはて、よ
 あまりたる心ことははかさしてあさきかたにやみつきの跡
 いかにしておもひやみなん夜の雨のふりそふなみた身もうきぬへし
 いくたひの遠き絶まをしのひけん心なさを身のちきりにて
 わかかたををきていつくにあまのすむさとのしるへを人のとふらむ
 おもひとりてことはりもせよことはりのなきうらみたにあれば有世に
 ともにみし月のかほのみおなしよにはかなや人はよその手枕
 雑十五首
 暁をたかをしへより庭つとりかならすつくる物となりけん
 いつはとはわか松はら霜みてる有明の月に鶴の鳴声
 雪をれのあとをとめきてさす月のかけめつらしき窓の呉竹
 おなし名になかれてこゝにきてみるも水分山は神さひにけり
 ふかくいりて心をすまぬ洞にはちはやしにはつる身のやとり哉

4453 4452 4451 4450 4449 4448 4447 4446 4445 4444
 折節の花折ちらしあかむすふたよりもあれや山の下庵
 暮ぬとてさと、ひゆけは一むらの煙もみえずあふ人もなし
 草枕たひはいつくの海山もうき寝をおなし露にわひつ、
 (xも)
 世の中よおもへは誰もうき舟のゆく末しられぬおきつ白浪
 われ舟のわれそかなしきなみ風の千里をもこそゆきかへりけん
 玉緒のなかきや何のむくひそとみたれたる世を見るそくるしき
 人はみなうとみはてたる身をひとり老といふ物のすてすそひける
 末の法千年もいく世山しなの岩ねの松をためしに
 山の
 筑波ねのしけきめくみの遠からすこゝにかしまの神もかしこし
 何ならぬ手向なからも神は猶うくらん物をやまと言の葉
 (以下余白)
 (第5紙)